國學院大學学術情報リポジトリ

縄文の哲学思想：公開学術講演会1：特集研究開発推進機構十周年

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小林, 達雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001738

公開学術講演会（平成二十九年十一月二十五日）

縄文の哲学思想

小林達雄

ただ今、ご紹介にあずかりました小林でございます。「縄文人の哲学思想」というのは、ちょっと構えたタイトルでございまして、言うなれば、縄文人の心とか、心構え、そういったものに関わることについていろいろ考えてみたいというふうに思っております。日本列島を舞台とする歴史をさかのぼりますと三万五千年前ぐらいまでたどり着きます。これは、氷河時代の旧石器文化であります。ナウマンゾウやオオツノジカなどの大型の動物、今では絶滅しておりますけれども、そういう大型動物が群れをなしていた時代の話から始まります。

やがて、一万五千年前ぐらいに、実は、大きな、画期的な大事件が起こります。それを縄文革命と呼んでおります。それまでの旧石器時代における遊動的な生活様式、つまり、しょっちゅう食べ物を求めて動き回らなければいけなかったような生活、そういう生活様式から、定住的な村を営むようになったという大きな画期であります。これが一万五千年前のことでありまして、このことを裏付ける有力な証拠としまして、土器を製作し、利用するということ

が見られます。土器は粘土を確保して、そして、それをこねて、形を作り上げ、乾燥させて、そして、たき火で焼き上げるわけです。一言でさっと流しましたけれども、これにかかる日数というものは相当なものであります。

これは、定住的な生活が始まり、軌道に乗ったということを何よりもよく物語るわけでありまして、縄文革命の標識として、この土器を使い始めたということを表看板にして、われわれは考えています。それまでの旧石器時代の旧石器人というのは、自然の秩序の中に組み込まれた一要素でしかありませんでした。ところが、この縄文革命を契機にして、その自然の秩序から一人抜け出します。そして、人としての歩みを展開していくわけであります。

まさに、それまで所属していた所から離れて、いわば無所属になったというのが人間の姿であります。無所属になった人間は、その生活の本拠をムラに持ちます。ムラというのは、自然の中の一角を自分の好みの広さを切り取って、そして、そこを自分たちが住みよいように、いろいろな必要な施設を整えたり、そうしていくわけですが、まさに、それまでの自然の中には手に入れることができなかった全く新しい空間を人間は独占するわけです。

この空間の中に、いわゆる人間的な生活が始まります。もはや動物ではないんだという人間自身という意識がこのとき芽生えたというふうに考えてよろしいんじゃないかと、私は思っております。このムラの生活が始まるということはとても重要な意義があります。自然から脱却し、独立した人間は、そのムラに本拠地を置いて、周りの自然を眺めるという、新しい展開を経験するわけでありますけれども、この重要な点は定点観測をすることができたというところにあります。それまでは、自然の中でグルグルグルグル這いずり回っていたそういう生活から、本拠地を定めて、そして、定点観測をして自然との対話が始まったわけです。いわば、それまで自然の中に身を置いた縄文人は自然から離れるとともに、自然と新しい関係をつくります。それは、自然を対象化するということです。

対象化するというのは、その自然を観察し、観測するということが始まったということであります。観測、あるいは、

観察、監視するということは、縄文人を取り巻く自然のさまざまな要素について、動物、植物、山や川、木々、そういうものの位置をその定点から捉え、そして、季節によって移り変わるそれをずっと同じ視点から眺めるということが始まったわけです。ここに縄文人的な心というものの芽生えが、あるいは、縄文人の心に刺激が新たに加わったということであります。

村の周りにはハラが展開しておりました。ハラというのは、それまで身を置いていた自然的秩序が保存され、維持されている空間であります。ムラを取り巻くハラ、そして、取り巻かれているムラは、ますます自らの空間の整備を進めております。家を建てます。ごみ捨て場を配置します。食べ物を蓄える施設、穴蔵のようなものを作ります。広場を造り、社会的な共同作業をそこでやったり、祭りを展開したりします。さらに、家のつながりの輪の中に共同墓地が設けられます。まさに、縄文人のムラというのは、生きている縄文人、生者と死者との共同経営ということになります。そこに縄文人の祖霊信仰といいましょうか、そういうものの芽生えが促されるきっかけを得たということになります。

さらに、縄文人はそのムラの人工的な空間だけではなくて、それを取り巻くハラが、さらに、ヤマ、そして、ソラへと視線を広げていきます。近景から中景、遠景、そして、背景まで目が届くようになります。ここに浮世絵的な遠近観察が可能になってきたわけです。ハラの向こうにはヤマがあって、ヤマの向こうには背景としてのソラがあって、そして、ヤマとソラとの間には、飛び上がってジャンプしても届かないもう一つの世界、アナザーワールドと、そこで結ぶ、あるいは、そこととの関係を求めた、そういうスペースであります。

縄文人は、そうした中で、興味深いことに興味を持ち始めます。自分たちを取り巻くそのハラと、そして、さらに広がっているヤマの風景の中に、好みの自然物を抽出していきます。典型的なものは富士山のような左右対称のヤマであります。結構小規模な、それほど標高の高くないそのヤマでも三角山を自分の風景の中に取り込んでいきます。そ

の取り込み方というのは、だんだん新しい分野を開拓していきました。そのヤマから日が昇る、あるいは、そのヤマに日が沈むというような、そういう視線を探し当てるんです。つまり、定点観測の効用がまさにそれに発揮されます。

太陽は春分、秋分のとき、真東から昇って真西に落ちます。秋分が過ぎて、今、冬至に向かおうとしています。秋分が過ぎますとだんだん南よりから昇って、南よりに沈むんです。そして、その限界ぎりぎりが冬至ということになります。一番北の限界ぎりぎりの所から昇って、北のぎりぎりの西に落ちるわけです。秋から冬至にかけての自然の動き、日照時間が少なくなります。そして、夜が長くなります。秋のつるべ落としのそれを経験しながら、寒さが次第に厳しくなります。木枯らしが吹きます。そうこうしているうちに太陽は限界ぎりぎりの南の端から昇って、南の端に落ち、その観測は定点観測だから可能になってきたのです。その位置は、村の定点から観測していた太陽がどの山から昇るのか、どの山に落ちるのかということと関連がついていくわけです。

あの富士山は、もちろん縄文人にとっては特別な山でした。東京の西の地理に、八王子の周辺では、縄文時代の大きな安定的な集落がずっと一直線に並んでいます。不思議な現象ですけれども、実は、ここにはからくりがあったわけです。その直線的に並んでいる先にずっと視線を伸ばしていくと、その向こうには富士山がいるんです。そして、冬至のとき、そこに日が沈むんです。こうやって、それにちゃんと軸が合うような所にムラが形成されているというようなことをやります。やがてそのうちに縄文人は単に自らのムラをそういう春分、秋分、夏至、冬至という軸を超えて、また新しい営みを始めます。

ストーンサークル、環状列石というようなものは、実は、そのムラから離れて、つまり、ムラの格好な立地というのは、そうやたらにあるものではありません。住みやすい所を選んだその場所は富士山は望めるけれども、日が沈む太陽を望むことのできない、そういう場所になったりします。そうすると、縄文人は別の地点を選んで、そして、ま

さに冬至の日の入りを望めるような、その場所を探しだしてきて、あるいは、うまくそれを探し当てて、そして、そこに特別なモニュメントを造るんです。それがストーンサークルであり、あるいは、ドーナツ状の土手を巡らせたりします。あるいは、三内丸山の六本柱のように、柱を建てます。その柱と柱の間から、三本ずつが向き合っているその間から、夏至のときには日が昇るんです。そして、冬至のときにはその間に日が沈みます。それが、三内丸山のあの巨木柱の絵になったのです。それらを記念物、モニュメントと呼んでおります。

モニュメントは、何のために造ったのか。とにかく大変な労力です。日常的な労働の時間をちょっと頑張って造ったというようなものではありません。それをはるかに超えた労働力と人員が投入されます。ストーンサークルを造るのは一人ではもちろん、二人、三人かかっても、五、六人かかっても動かせないような大きな石を実は運んでおります。超絶といいましょうか、日常的な労働、技術、そういうものを超えたものすごい執念がそこに見られます。そうやってまで造るモニュメント、どういう意味があるのか、全く現代のわれわれにとっては計り知れないものであります。どう頑張っても分かりません意味は。彼らにとってやればやるほど腹がすくだけで、なんの腹の足しにもならないものをそんなに一生懸命造る。ところがそれが縄文の縄文らしさなんですね。腹の足しにならないものを一生懸命造りながら、実は、心の足しになるものを持ったということであります。

その記念物、モニュメントというのは、世界遺産のイギリスのストーンヘンジと同じようなものです。そして、その後のピラミッドとか、あるいは、私は万里の長城も単に外敵を防ぐためのものではないと考えております。われわれは、歴史を学ぶときに北からの侵入を防ぐためにあれを延々と築き上げたというふうに教わってきましたけれども、とんでもない話。あれはモニュメントであります。彼らのアイデンティをそこに確認するための施設を設けたというのが万里の長城であります。

その後、縄文時代にはそういうモニュメントはあちこちで造られますけれども、弥生時代になると一切ストーンサークルも巨木柱立も姿を消していきます。そして、弥生時代を象徴するような、環濠集落ができてきます。環濠集落というのは、ムラを溝で囲む、そういう施設です。深さ二メートルぐらい、そして、幅が二メートルあるぐらい、こんなに深い溝を掘り巡らすんです。佐賀県の吉野ヶ里遺跡では二キロメートルを超えます。それをずっと巡らせているわけですけれども、弥生時代の研究者、あるいは、多くのその他の研究者もあれを防御用の溝というふうに考えておるのが現状であります。けれども、それは大間違いです。それだけの力があるんならムラから出ていってポンポンみんなやっつければ済む話です。

しかも、面白いことに、環濠の外に倉庫があるんです。収穫した倉庫が外に並んでいるんです。戦いとなったら、まず倉庫を押さえられてしまいます。だから、最も重要な食糧庫を環濠が守ってくれるようにはなっていないのです。実は、こんなに深い溝を掘るということは、それだけの土の量を排出することです。実は、その土が欲しかったんです。その溝を掘った土をずっと積み重ねて、ずっと連ねていくわけです。土手を造っていくわけです。新幹線でも高速道路でも、埋め立てのためにあちこちで幾つもの山が崩されてきました。それぐらい土というのは必要とされるのです。その土を弥生人が土手を造るために運んでこようとすれば、大変な日数と労力が必要とされます。そうじゃないんです。溝をどんどん掘って、その土を盛り上げるとずっと土手ができていきます。弥生時代の環濠集落というのは防御用でも何でもないんです。俺たちはこれだけの力があるぞということを示す、そういう施設だったんです。モニュメントなんです。

その後、ちょっとしたお金持ちが粋な黒塀を巡らすようなものです。そうやって土手を造って、そして、自分たちの存在を確認し、アイデンティをそこで見せびらかしているわけです。だから、弥生時代というと、新しい時代で戦

争の時代に入ってきます。だから、環濠も戦争に関わるものだというふうに考えてきたことは大間違いということになります。その証拠には、わざわざ掘り上げた溝の中からゴロゴロ土器が出てくるんです。要らなくなったものをみんな捨てているんです。溝が必要なら、ちゃんとさらって、溝をいつも保っていなければいけないわけです。土器は腐らないからいくらでも残って出てくるんですけれども、それと一緒に腐る有機質のごみをいっぱい捨てていたんです。それは腐って残ってないから分からないんです。そんな矛盾した話はないわけです。堀が必要なら、ちゃんとそれをさらっておかなければいけない。せっかく溝を掘っているのに、それを埋めているというのは大きな矛盾です。大体、われわれは、縄文時代や弥生時代を研究するときには、われわれから見て矛盾しているところを見つけると相当いいところに近づけます。

もっと決定的なことがあります。掘り上げた泥をどちら側に、堀の溝の外側か内側か、どっちに盛っているかというと、実は土は全部掘りの外側に盛っているんです。防御用だとしたらおかしなことです。攻めるのもたやすくて守るのも難しくなるんです。利敵行為をものすごい労力をかけて造るんです。大きな矛盾です。いまだに、しかし、大部分の弥生研究者はあれを防御だと言っています。訂正することをためらっているんです。

その後、実は、古墳時代の前方後円墳、前方後方墳の築造に移っていくわけです。そして、その後、古代寺院に移っていきます。仏教の信者が多かった。あるいは、仏教の信仰のために寺院がずっと北の果てまで、福島県の北のほうまであっという間に白鳳期の寺院が造られるのは仏教の信者とか、あるいは、仏教を布教するためとかいうことではないんです。あれはモニュメントの続きです。その後、信長の安土城から始まって、平城ができてきます。これもモニュメントです。

そして、忘れてはならないのがバベルの塔です。あれも、実は、人が記念物を造るための世界的な遺産であります。

この間、バベルの塔が上野の東京都美術館にやってきました。早速見にいきましたけれども、感動的な出会いを経験することができました。バベルの塔はモニュメントです。そして、縄文人の単なる縄文人だけの思いが環状列石とか、そういうものに表れているものではなくて、世界的に見ても、あちらこちらで同様な意図から、意識から、心から、記念物を造っていくわけです。

面白いことに、歌川国芳の浮世絵の中に、隅田川を見通して描いているものがあります。そこにスカイツリーが既にあるんです。実は、そういうものを造らなかったけれども、それを造りたいという気持ちっていうでしょうか、そういう存在を許す、あるいは、必要とする気持ちがあったことをよく表しています。エッフェル塔もそうでした。東京タワーも。そして、次に、スカイツリーまで来ている、その心というのは、縄文時代からずっとつながっているものです。このことはとても大事なことであります。

しかも、面白いことに、その縄文人の記念物というのは、造ろうと思って始めたからには、それを仕上げることに目的を置くということではないということを示しておりました。丸く石を並べていくんです。あちこちが膨らんだり、痩せたりしている、そういう箇所が一つのサークルの中に見られます。丸くしようと思えば丸くできるんです。ところが、そうじゃないのがあるんです。あれは、工期が決まっているんですね。あれを造るのは、複数のムラの人たちが寄ってたかってあれを造るわけですけれども、こちらのムラからやってきた人の石を並べる箇所はここからここまで、隣は、またその隣のムラの人たちがここからここまでというものを分担していくわけです。

ムラの働き手はそれぞれ多い少ないがあります。働き手の多い所は石をたくさん運ぶことができました。だから、そこは節くれだっているんです。働き手の少ないムラの多くは貧弱に、ちょんちょんちょんちょんと並んでいるだけです。しかし、工区を任されていました。たくさん石を運ぶことのできたムラの人たちは、少ししか運べない、そう

いうムラに手助け、協力はしませんでした。自分たちの工区は自分たちの工区。そして、働き手の少ない所は、それなりに参加していくわけです。それがストーンサークルです。

それと同じように、例えば、栃木県小山市に寺野東遺跡というのがありまして、これはまた面白いです。差し渡しが一六五メートルというドーナツ状の土手を築くんです。一六五メートルというと、古墳時代の前方後円墳の中でも大きいほうです。それなのに縄文人はまさに無手勝流です。何にも工具がないんです。せいぜい棒の先に石斧を結い付けて、それで土をほぐして、そして、それをかき出すという作業で、一六五メートルの直径の窪地を造るわけです。そして、その土を外にずっと、例によって、弥生時代の環濠のように土手をずっと築いていきます。土手を歩くと沈んだり、また、背が高くなったりしながら歩くことになります。つまり、高さがまちまちです。それが例の環状列石を造るときに似て、働き手の多い工区はどんどん土が高くなるんです。ところが、少ない所は低いままで歯ぎしりしているわけです。けれども、誰も助けようとしません。おまえの所が足りないのか、じゃあ、ちょっと力を貸してやるからというわけにはいかないんです。それとは別のしきたりが働いているわけです。例えば、その土手を築くというようなことというのは、寺野東遺跡だけじゃなくて、他にも例があるんです。北海道千歳市の周堤墓というのがありますが、これは、直径七十五メートルが一番大きいんですけれども、土手がずっと巡っておりますけれども、この土手を歩くと沈んだり、浮いたりしません。ちゃんと水平に、同じ背の高さを維持しながら歩いて回ることができるんです。つまり、全体を水平にしようと思えばできるんです。だけどしていない。だから、でこぼこにしたままになっている。

あるいは、ストーンサークルが太ったり痩せたりしている。そういう状態をそのまま受け入れています。彼らの関心は全体を整えるということを目的としているんではなくて、それを造り続けることが目的なんです。そういうふうに読み取るしかありません。彼らは記念物を造るときに、いついつまでに仕上げようというものではなくて、ずっと

それに関わりを持つということが重要なんです。

宮沢賢治が完成とは永遠の未完成であると言うんですね。なぜ宮沢賢治を出すのかといったら、小林が言っているのは信用できない。しかし、宮沢賢治も言っているんだから、まあ、そうなのかなと思ってくれる人が、慌て者がいるんじゃないかなと思いまして、わざわざ引き合いに出すわけです。ところで、私たち、ちょっと問題があるんです。つまり、とにかく、完成させようと目先のことにこだわるのです。そして、それは役に立つもの、腹の足しになるものを造ろうとします。これが一番危険です。

腹の足しになるもの、みんなの幸せになるためのものであるといって、飛行場を造ったり、道路を造ったりしていますけれども、あれは、一部の人が利権を行使しているんです。というようなこともあるということです。みんながみんなそうじゃないけれども、むしろそういうことが垣間見られるというのは、役に立つものを造るということについては、少しわれわれは警戒しなければいけない。

縄文人の心をもう一度呼び起こしてみたいというふうに思います。原子力発電は電気が不足しているからといって一生懸命造ったけれども、また再稼働させたりしようとしていますけれども、いまだに使用済みの核燃料の行き場がない。電気が足りないからといって、あちこちで消灯する。役所の中でも。廊下の電気をちょんちょんちょんちょんと消していきます。エレベーターが三台あると二台休ませたりします。そのくせ、あちこちで、今、夜間照明が。それと、これからなおのことクリスマスが始まりますと、あちこちでイルミネーションが輝き始めます。余って余ってしょうがないんです。さらに電力を確保して、それを売り付けて、そして、そこまで言うとあれですので、やめますけれども、つい私は古いほうをやっているものですから、古いほうだけでは満足できないんです。どうしても、自分が身を置いているそういう今を見ながら、重ねて考えるということに癖がついてしまいまして、ちょっと過激な話が

たまに混じります。しかし、私、おかげさまで温和な顔していますので、みんなが許してくれるんです。

ところで、ムラというのは、まさに人工的な空間なんですけれども、そのムラを取り巻くハラがあります。ハラは、かつて身を置いた自然的秩序がちゃんと維持されている所です。ムラの生活の中で、文化的、社会的な活動が繰り広げられますけれども、それを保証するのはムラを取り巻くハラであります。ムラから出て、ハラにある資源を獲得し、ハラにある食料を獲得し、必要な道具の資材を獲得し、そして、ムラに戻ってくる。それがハラとムラとの関係です。

縄文時代にはこのハラとムラとの関係がずっと続くんです。一万年以上。これは、大変なことであります。日常的な縄文人のムラの周りはハラで囲まれている。ハラには自然が残っていて、その自然の資源と共存共生しているというのが縄文の有りようなんです。けれども、大陸側の村の始まりはそうではないんです。大陸側のムラの始まりは、農耕、農業、そういうものと連動しているんです。農耕が始まってムラが造られる。そして、新しい西洋的文明への足取りが高らかに鳴り渡るようになるわけです。

大陸側のムラの周りはハラがないんです。ハラがあると、それは目の敵にして、競って開墾しようとします。そして、その原を全部人工的な空間に塗り替えていきます。ハラのままでは許さない。ハラのままは、それは、遊休地であると見なすんです。あるいは、経済的な効率がそこに潜んでいるのに役立てていないじゃないか、それで、徹底的にハラをいじめていくわけです。少しでも農耕地を増やそうとする活動がそこに展開するわけです。

日本列島の縄文のムラの周りはハラでした。大陸側はムラの周りはノラでした。野良仕事のノラです。そこで、われわれは本当にそういう歴史を習ってきたんです。人類は自然との厳しい戦いを戦い抜いてここまで来たんだと。人類の努力と力というものは大したものだ。なるほどそうだなと思って習ってきましたけれども、果たしてそうでしょうか。一万年、自然との共存共生が続くこの縄文と、大陸側のムラの少しでもハラという空間があれば、それを開墾

して、ノラに変えようとするそのやりようとは全く裏腹なものでした。

つまり、縄文人がムラの周りに展開するハラと共存共生を一万年以上にわたってやってきたにもかかわらず、そういう経験は大陸側にはなかったんです。直ちに自然と対立していたり、自然と戦争を始めるんです。その中から四大文明が生まれていきます。そして、それが西洋的な歴史観につながっていきます。それこそが典型的な正しい人間の歴史だったというふうにやってきたわけです。その成れの果てが、われわれが身を置いている現在です。

もう後戻りできないような深刻な局面を迎えていながら、われわれは手をこまねいてといいましょうか、もっともっと原発を増やしたりとか、いろんなことをやって。それは、縄文人は思いもよらないことです。われわれが必要なのは、金はまた別のやり方で確保し、経済活動は別のやり方で活発化していく、それしかない。役に立たないものを造る。そこにものすごい労力と時間を投入していく。金もうけのことなんか考えなくて済むような、そういうもの。そういう分野がまだ残っている余地があるということです。今なら。けれども、もしかしたら核戦争が現実のものと、もう一度核戦争が現れるかもしれないというような、そういう状況を自らが、われわれは迎えているわけです。

例の大恐竜時代というのがありました。だけれども、なぜあれが滅んだかが謎になっていますけれども、みんな滅びていきました。われわれ個人的な個体は寿命があるというのは誰もが分かるんです。恐竜の一つ一つの種について、あれは、一頭一頭の命は限りがある。それは分かったんです。けれども、歴史が教えてくれるのは、地球上に現れたあのすごい、すさまじいあの恐竜の姿を消していった。個体ではなく、種が個体と同じように寿命があるんです。人間という種にも寿命があるんです。それを大切に先延ばししようとすればなるんです。けれども、それを諦めて、そして、核だとか、何だとかいうところに走る。自らが種の寿命がそろそろ来るかもしれないというようなことを考えなくちゃいけない局面に来ているのに、そういうところに考えが及びません。

僕たちは縄文時代、あるいは、世界の先史時代のことを眺めておりますけれども、もう一度世界の、あるいは、われわれの身近な縄文から今をもう一度照らし出していく必要があるというふうにつくづく思います。

ところで、縄文土器というのは縄文文化を象徴するものです。縄文土器はウツワなんです。底があって、胴体があって、そして、口があるんです。ところが、縄文土器はそんなものじゃないんです。世界中の焼き物はこういう容器なんです。だから、大体サラダボウルみたいなものを原型にして、そのちょっとしたバラエティーがある。あるいは、大小があるというのが、世界の焼き物です。けれども、縄文はそうではないんです。全く別の動きをしています。ウツワなのに、ウツワを徹底的に追求しないんです。ウツワとしての機能、役割を追求することなく、縄文土器を作るんです。

物を出し入れする器という、あるいは、蓄えておく。そういうのがウツワです。縄文土器もウツワなんです。けれども、世界中どこを探してもないような特徴を縄文人は持っているんです。土器に突起が付くんです。口の部分に。後で用意した図案とか、私の資料を興味ある方は見てください。それを抜きにして話を進めていきますけれども、とにかく、縄文土器は特徴的です。あるいは、せっかく口縁まで作ってきたのに、口縁をへこませて波打たせるんです。山があり、谷がありと。

突起を作ると出し入れに邪魔なんですよ。まさにウツワとしては無用の長物なんです。無用の長物で済めばいいんですけれども、邪魔なんです。物を出し入れするというのに突起が付いていたら邪魔なんです。それでも突起を作ることに一生懸命なんです。縄文土器しかないんです。こんなものは。世界中を見ても、古今東西を見ても、縄文土器しかないんです。器であれば単なる道具です。道具としてずっとこれを追求していくとビール用のコップの形になっていくんです。

あるいは、タッパーウェアになっていくんです。タッパーウェアと縄文土器というのは対極にあるんです。全く対

極にあるんです。機能的には、縄文土器は劣等生です。器としては。大きな土器を作るとすれば貴重な粘土をもっと必要とします。それなのに突起を付ける。時間もかかります。しかし、これにこだわるんです。北海道から、ずっと九州、そして、さらに、あろうことか沖縄まで。沖縄の土器には突起があるんです。かつて、鳥居龍蔵は沖縄の土器にはが突起があるから縄文だって言うんです。それを早いときに指摘しているわけです。ところが、今、研究者がどう見ているか。沖縄はやっぱり本州と違う。違うに決まっているんです。所変われば品変わるんですよ。

ところが、それにこだわっていて、だから、別ものだ。縄文文化は一枚岩ではないんです。全部散り散りな集団がそれぞれ競っているんです。競ってやっていたから活気のある文化ができたんです。特に、東の人口も高い、そして、競っているんです。西のほうの縄文人の世界というのは、人口が少ないんです。だから、文化圏が広くなるんです。東のほうは、文化圏といいますのは、一つの領域的には狭くなっていきます。そういうところにも表れているんです。

それにしても、突起にこだわりを持つ縄文人が、沖縄まで丸木船で行ったんです。土器だけが行くわけじゃないんです。運んでいるわけです。そして、縄文人が気にしているヒスイを持っていったりします。そういういろんなものを見ていっても、縄文とのつながりは極めて濃いものなんです。縄文人は朝鮮半島と九州との間にある対馬を占領していました。対馬は朝鮮半島により近いんです。九州より。だから、対馬まで行った勢いをもってすればあっという間に朝鮮半島に行けるのに行かないんです。言葉が違うんです。言葉というのは文化なんです。文化は言葉。そして、言葉は文化。こうやって相互作用をしていくものです。

ドーキンスという遺伝学者がおります。『利己的な遺伝子』という国際的なベストセラーで有名です。ドーキンスの立場は、生命体としての個体はＤＮＡがずっと継承しているんです。伝えていきます。けれども、文化的な要素もちゃんと伝わっていくんだということを指摘するんですけれども、それは何かという説明があいまいです。私もドー

キンスの本を読む前から、実は、文化的遺伝子というものがあって、そして、それが今日の日本文化までつながっているんだというふうに直感しておりました。その後、その文化的遺伝子というのは言葉であると確信しました。言葉なんです。

今、身を置いている日本文化というのは、世界中各地で、ちょっとしたインテリは興味を持って見てくれます。たまに外国に行くと、小林が来たと言ってくれるのは、僕が人柄がいいだけじゃないんです。日本文化を背負っているからなんですと私は思っています。そうやって相手してくれる。相手されるに至る、そういうものを日本文化は持っています。非常に個性的で、そして、いろいろな意味で考えさせられると思っています。それは、どこから来るのか。歴史的な背景を今日では考えられます。

歴史的な背景といえば、先ほどお話をしたところに戻りますが、縄文人が一万年以上にわたって、ムラとハラとの自然との共存共生を経験してきたことに対して、大陸側はそれがなかったんです。すぐ自然と対立して、そして、征服していくことになったんです。そのための技術を磨いていきます。その技術が文明なんです。

文化的遺伝子は言葉であり、日本語は相当変わっています。日本語は独特の個性を持っておりますけれども、これは、歴史がずっとつながってきている何よりの証拠です。その言葉は縄文時代まで、軽く、さっとなんの障害もなくさかのぼることができると思います。『万葉集』は八世紀に出来上がりました。あそこに歌われている万葉集のあの歌は、決して昨日きょうの、あるいは、ひいおじいさんのまたひいおじいさん、そのまたひいひいおじいさんの頃に出来上がった日本語、大和言葉を使って作られた歌ではないんです。もっともっと。

大野晋先生をはじめとして、日本の国語学者は、大体、日本語なんていうのは、せいぜい弥生時代ぐらいから始まったと考えているんです。それは大間違い。チョムスキーはちゃんと発見しました。まさに言語学の革命的な経験でした。

人間は基本的文法をちゃんと遺伝的に持っていたと。だから、言葉が来る前の歴史があって、前史があって、そこでは身ぶり手ぶりに大いに頼ってコミュニケーションをやっていたのではないんです。彼らは、もともと言葉を持っているんです。下北のサル、一番北限のサルです。丹波篠山のサルと出会ったことがないのに、それぞれの所で、語彙は人類と比べたら本当に少ないですけれども、しかし、一つの有りようを考えていくのは有効です。

出会ったことのないサル集団があっちでもサルことばをもっている。人間、もっと言語中枢が発達しているんです。それから、直立で動き回ることによって、ここの喉の所の空間が広がってきて、発声もバラエティーに富むものになりました。それだけの能力を備えた人類は、どっかから言葉が来るのを待っていたなんていうわけにはいきません。滑らかにお話をして、そして、愛を語らい、けんかもした。それが言葉なんです。それは、チョムスキーは、今はいろいろ欠点もあら探しが行われておりますけれども、チョムスキーのその発見は大変な言語学の革命的な成果となりました。

日本語は遠くからやってきたんではないんですよ。日本語は日本列島を舞台にして日本語が生まれたんです。縄文大和言葉は縄文時代から既にあった。しかも、一万年以上にわたって。そして、言葉というのは文化です。文化が言葉を生んで、言葉がまた文化を彩ります。この中で、縄文大和言葉は次の万葉言葉につながっていく素地が出来上がっていったわけです。

日本語はいろいろな点で興味深い特徴を持っておりますけれども、その中で一つ注目すべきものがあります。オノマトペです。擬音語、擬声語、擬態語です。じーっとうつむいている。川がサラサラ流れるんですよ。風はソヨソヨと。それはみんな擬音語です。擬声語というのは、テッペンカケタカなんですよね。ツクツクホウシとか、ブッポウソウと鳴く鳥とか。これは、人の言葉をつなげているんです。擬態語というのは、じーっと見るとか、そういうものです。

私たちは言葉の中でオノマトペを言う。これは、世界に七千以上の言葉があると。もっとあるかもしれないです。

ほとんど絶滅してしまった。あるいは、絶滅寸前のものがたくさん含まれていますけれども、そういう言葉。どこを見ても、日本列島ほどオノマトペが発達しているものはありません。マンガの話が先ほど出ましたけれども、マンガの中で特徴的なのは、ピストルもものを言うんですよ。バキューンとか、ズドン。大変ですよ。いくらでもマンガの中にオノマトペが飛び交っています。

それは、実は縄文人が一万年以上にわたって自然と共存共生してきたことの大きな証拠の一つです。そのオノマトペというのは、縄文人同士の言語活動の中からだけで来たんじゃないんです。風がそよぐ、そよそよ吹くんですよ。あれは、風が吹いて音を立てているんじゃないんです。ささやいているんです。つまり、どういうことかというと、音を耳をそばだてて、そして、音をキャッチしているんじゃないんですよ。自然が発する声を聞いているんです。音じゃなく、声なんです。つまり、縄文人は縄文人同士の言語活動とは別に同じようなレベルで、あるいは、近いレベルで自然と向き合い、自然と言語活動を活発に展開していた。そういう成果です。

この自然との付き合いの中で、共存共生といって、われわれはよく説明してきましたけれども、共存共生というと、いかにも生態学的な意味合いが強く聞こえていやなんです。これは、いよいよ、自然との共感、共鳴といったほうへ。共鳴、共鳴というほどに自然との関係は深いんです。そして、自然の移ろいの中、自然の表情の中で、その表情をまた読み取って、そして、自分の心と関わりを持たせるんです。それが日本的自然観です。

やがて俳句につながっていきます。冬になると、そろそろ、今、まだ紅葉しているところが多いですけれども、これも終わり、すると山が眠りに入るんです。長らく眠っていた春になると山が笑うんです。そんな話はどこにもない。他の言語に。だから、実は、日本語のその中に縄文的な文化的遺伝子が息づいていて、そして、今の日本文化というのは、全く縄文文化というのはずっと遠い話かと思っていたけれども、これはそうではない。ついこの間までずっと

続いてきていた。その先端にわれわれはいるわけです。日本語っていうのはたくさんありまして、向こうの外国に行くと、例えば、懐かしいという言葉はないんです。英語に。聞いてみると、いや、ないな、適当なのはというんですね。懐かしいという言葉もないと懐かしがらないんですよ。言葉というのはそういうものなんです。懐かしい。ほろ苦いなんていう言葉はありますか。本当にものすごいバラエティーに富んで、変化にも富んで、いくらでもそれを変化させることができるんですよ。物悲しい、うら寂しい、みんな違う。それが分かるんですよ。

それは、自然との共感、共鳴の中から生み出されてきたものなんですよ。そして、それは、今、俳句につながっていると私は思います。この会場にも恐らく、あまり上手ではない俳句を作っている方もおられると思いますけれども、あれがある限り日本人に日本文化が生きているわけです。どんなに化粧だとか、そういう服装だとか変わっても、多分、日本文化はこのまましばらくはいきます。

そして、重要なのは、日本文化こそが世界にいろいろこれから行く末を考えるときにブレーキをかけるときの重要な要素の一つになるんじゃないかというふうに思うわけです。もう時間が来ました。ちょうど。実は、私は、今、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックの聖火台に火焔土器という提案をしています。いろいろやっているんですけれども、まだ具体的な進展がみられません。問題は、今年中にコーディネーターが決まるというふうに伺っています。今年中に駄目なら、少なくとも今年度中、来年の三月までの間にコーディネーターが決まってきますということです。それから、また一働きしないといけないんです。皆さん、まだまだです。

みんなが、火焔土器というと、そうだそうだと言うんですよ。だけど、もしこれが駄目になったら、縄文土器の話ではなく、縄文が発しているメッセージについて、全く鈍感だということを示すわけで、これは、日本の文化としてはたまらないことなんです。どうか、皆さん、応援をお願いいたします。どうもありがとうございます。